

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

91

福島県立博物館友の会・福島県立博物館共催展

野山の宝 化石・鉱物展

～化石・鉱物探検隊10周年成果展～

福島県立博物館





会津若松市上三寄での採集 2004.10.16



只見町布沢での調査 2004.7.10



化石・鉱物探検隊

現在隊員数 37 名。
山に登り、沢に下り、福島県内各地を化石や鉱物を求めて探検。随時隊員募集中。



福島県立博物館友の会・福島県立博物館共催展



野山の宝 化石・鉱物展

～化石・鉱物探検隊 10 周年成果展～

会期 2月7日(土)～4月5日(月)

展示は、例会コーナー、コレクター・コーナー、アレンジメント・コーナー、体験コーナー、研究資料コーナー、化石・鉱物探検隊一〇年のあゆみコーナーなどから成っています。
探検隊員が例会で採集した標本を産出地や産出鉱

イノセラムス
中生代の二枚貝化石



クリスタル
珪酸塩鉱物の水晶



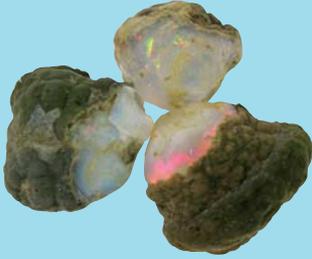
ミネラル
鉱物の総称・貝化石なども含む



【キャラクターデザイン 菊田寧々】

野山は化石や鉱物・岩石の宝でいっぱいです。化石は、太古の生き物の営みを私たちに伝え、鉱物・岩石は壮大な地球の火成活動を語りかけてきます。化石はかつて生きていたものを直感させ温かさを感じさせます。一方、鉱物・岩石は無機質で冷たい印象を与えますが、神秘的な造形美が心を奪います。福島県立博物館友の会の会員有志で組織する「化石・鉱物探検隊」は平成二一年に結成一〇周年を迎えます。福島県内をメイン採集地として化石・鉱物の採集活動はもとより、調査研究活動も行ってきました。今回、これまでの採集標本や研究資料を展示し、化石・鉱物の魅力を多くの方々に味わっていただくとともに、活動の様子を知っていただくためにこの展覧会を催すことにしました。
マスケット・キャラクターの三人が登場します。イノセラムス、クリスタル、そして、ミネラルです。この三人が随所に登場して展示資料をご案内します。

■観覧料 一般・大学生 二六〇(二二〇)円 小中学生・高校生は無料 ()内は二〇名以上の団体料金です。

| | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
|  <p>1</p> |  <p>2</p> |  <p>3</p> |
|  <p>4</p> |  <p>5</p> |  <p>6</p> |
|  <p>7</p> |  <p>8</p> |  <p>9</p> |
|  <p>10</p> |  <ul style="list-style-type: none"> 1 アオザメの歯 宮城県大和町 個人蔵 2 カネハラカガミ 塙町西河内 個人蔵 3 ムカシチサラガイ 喜多方市山都町 個人蔵 4 ヒラウネホタテ 昭和村下中津川 個人蔵 5 オパール(ノーブルオパール) 西会津町屋敷 個人蔵 6 オパール(蛋白石) 西会津町屋敷 個人蔵 7 水晶(日本式双晶) 岩手県陸前高田市 個人蔵 8 黄鉄鉱 只見町黒沢鉱山 個人蔵 9 蛍石 南会津町館岩 個人蔵 10 針水晶 南会津町館岩 個人蔵  | |

関連行事

展示解説会

- 2月 8日(日) 13:30 ~ 14:30 探検隊員
- 3月 29日(日) 13:30 ~ 14:30 探検隊員
- 4月 5日(日) 13:30 ~ 14:30 探検隊員

化石・鉱物標本プレゼント

展示解説会が行われる3日間に限り、解説会終了後とっておきの化石や鉱物を来場者にプレゼントします。数量限定。



山ごとに展示するほか、個人活動で採集した標本をコレクターごとに展示します。また、鉱物や岩石のオブジェ、鉱石を加工したペンダントなども展示します。紫外線を照射すると蛍光を発する鉱物を見ることが出来る体験コーナーもあります。さらに県内動物化石産出地マップ、会津地方鉱山採鉱年表、地形と地質の景観集、火砕流台地「背灸山」の研究など個人研究資料を展示するほか、写真パネルで一〇年間の活動の足跡を振り返ります。

(自然担当 小澤義春)

イベントレポート

秋の企画展

「遠藤香村―会津に生きた会津の画人―」

◎記念公演 平成二〇年十一月一六日(日)

「香村が見た聞いた江戸時代の怪事件」

出演 詩人 和合亮一さん

アナウンサー 浜中順子さん

アナウンサー 若槻麻美さん

アナウンサー 和合敦子さん

福島県教育庁社会教育主事 天野和彦さん

遠藤香村は制作のかたわら、さまざまな出来事の間を書き留めていました。それをまとめたのが『石田拾穂』です。遠藤香村展記念公演「香村が見た聞いた江戸時代の怪事件」では、同書から選んだ四話を出演者のみなさんの朗読パフォーマンスで紹介しました。イベントの結びに披露された和合亮一さんの詩から当日の熱気を感じ取っていただけなら幸いです。

(美術担当 川延安直)

香村に捧ぐ

僕たちは遠藤香村に思いを馳せた
彼がどんなふうになら日本を会津を旅したのか
歩いて歩いて 描いた 世界を
私たちは いま ここで
絵の美しさ その不思議な筆先を
受け止めている

江戸時代の会津若松
聞いたのだらう鳥の声 涙したのかもしれない
山影とその遙かな先

彼が息を詰めて見つめたその人物
彼が生きた時間のため息が聞こえる
彼が描いた絵の山野を歩き
深呼吸をしたり 亡くなってしまった彼の人を思い出したり 久しぶりに会った友だちを大切に思ったりすることが出来る

絵描きの香村さん
今日は絵の江戸時代を有り難う
彼は絵と一緒に江戸時代も残したのだ
ああ会津奇談会 僕たちは彼の残した不思議な話を こんなふうにもこれからも愛して行くだろう

例えば下女の口から顔を出したネズミの可愛らしさや(ネズミが入り込んでいるのに あんなにぐっすり眠れる下女を 心底 うらやましく思う)

茶屋に現れた新しいおかみの笑顔や(江戸時代の事件で良かった 現代だったら遊女 金盛は 新幹線ですぐに帰ったと思う)

間違いなく未確認飛行物体であるとの確認と確信や(とにかく江戸時代にも未確認飛行物体が確認出来ただけは 確認出来ました 宇宙人も 会津見学したい時もあるんだなあ)

そして今も向こう岸で生えているのか
茅茅茅

ここにこうして集まった僕ら 会津奇談会
不思議さはどこからやってきたのか そして僕はなぜに会長なのか
もとい 不思議さはやって来た

ところで 僕には 今日の茶屋の話の舞台となった 小田原のあたり 香村の絵や奇妙話を聞いていると 箱根の関所が浮かんでくる

香村さんは
何回 この関所をくぐったのか
諸国を歩き回り この門をくぐり
旅人 香村さんにとっては

この門が到着で この門が始まり

僕はこの間 箱根に出掛けた
関所のあったところをぶらぶらと
箱根の歌を作るために 歩いたのだ
関所あたりには 一瞬にして東と西が入れ替わってしまう不思議な力が
たくさんあった

あたりに 聳えているのは
太い 杉並木だった
変わらない一本の並木道だけど
関所を越えようと
東あるいは西の並木道になる
変わらないのに 変わる

そんな不思議な一瞬が 関所なのだろう
そんなふうにも思っていた
門の扉の木の壁を見つめた
江戸時代のたくさんの
東と西がここで入れ替わったのだ
昔と今が入れ替わっている
これは 時間と 空間と 心の扉

例えば いくつもの扉
いくつもの小さな関所を 僕たちは心の中に
持ってきたのかもしれない

玄関から出る時
大切な人と手をつなぐ時
ひどいことを言ってしまった時
空のかなたの雲に目が奪われる時
思い切って「ありがとう」と囁く時
僕たちは心の中で 重たい扉を
一瞬にして 開けている

一歩だけ 隣の世界へ
間違ってしまった時には 振り向く
嬉しい時には そのまま出掛けるのさ

さあ一歩 香村は 僕たちに扉を
いくつも案内してくれた
僕たちは 本日 そこを何回も通り抜けた
心の東から西へ 想いの西から東へ
愛情の北へ 志す南へ 僕たちは草鞋を履いて
いや 不思議な話に 耳を澄まして
さあ一歩 歩いた 歩いた

香村が残した 江戸時代の怪事件
そのお話を扉をあけたら 頭の後ろにゆるがない黒い山の影があった

ため息をついたら 心の後ろに名を知らぬ赤い花と露があった

背筋が寒くなったら 時間の後ろにたくさんの虹色の舟の帆があった

ふむふむとうなずいたら 胸の奥に青い川岸で水呑む鹿があった

香村さんってどんな人だったんだろう
親しく想えば 冬へと傾く会津の空を
横切る白い鳥の群れ

僕たちの心を 一瞬にして 開いて 奪った
香村さんのロマンス!
なんとも 不思議な人だ
江戸時代の会津の 風に吹かれたら
胸の中に 心だけが 残っている
不思議だ

香村よ 江戸の人々よ 日本よ 会津よ
昔の家族よ 心の中で 遠くで
大きな 時間と 空間の 関所で

僕を守ってくれている祖先よ 例えば

ひいひいひい
ひいひいひいちゃんばあちゃん
ひいひいちゃんばあちゃん
じいちゃん ばあちゃん
お父さん 母よ 息子よ

いまここに僕たちは
僕は 生きている
特に 不思議だ

Q：二〇〇八年における日本人のノーベル賞受賞者は、小林誠氏、益川敏英氏、南部洋一郎氏の三氏が物理学賞を受賞し、下村脩氏が化学賞を受賞しました。これで歴代の日本人受賞者は一六名になりました。ところで、あるノーベル賞受賞者が、「子ども時代に、福島県ゆかりの石井研堂の理科読み物が愛読書だった」と随筆に書いていると聞いたことがあります。どういう本だったのでしょうか。

A：その科学者は、一九六五年に日本で二番目にノーベル賞（物理学賞）を受賞した朝永振一郎氏（一九〇六年―一九七九年）です。

石井研堂（本名民司、一八六五年―一九四三年）は、

石井研堂とノーベル賞

福島県郡山の出身です。多彩な研究・著述活動のうち、明治期の子ども向け理科読み物は、特筆すべき大きな業績です。

石井研堂の理科読み物が、ノーベル賞受賞者朝永振一郎氏の子どもの時代の愛読書でした。資料は二つあります。

〔資料①〕朝永振一郎「私の物理実験」（朝永振一郎著作集1 鳥獣戯画 所収、みすず書房、一九八一年）

四年生のころ、石井研堂という人のかいた「理科十二ヶ月」という本を買ってもらった。この本には、（中略）いろいろの実験のしかたが書いてあった。（中略）たわいもないといえばたわいも

ない実験だが、そんなのを一つ一つやってみて楽しんだ。

学校で理科をならうようになってから、（中略）石井研堂の、もつとアドヴァンスト・コースの本をみつけ、それをむさぼり読んだ。

この随筆の初出誌掲載時期には、朝永氏は、東京教育大学の学長職に就いていました。

〔資料②〕朝永振一郎・篠崎かよ「対談科学者は語る」（NHKラジオ対談、一九六九年八月二〇日）（朝永振一郎著作集1 鳥獣戯画 所収、みすず書房、一九八一年）

朝永それから、いろんなそういうちよつとした実験なんかやれる、子供の理科の本があつて

Q&A

佐藤洋一

回答者
歴史担当

ね。これ、確か石井研堂って人がやっていたんだと思うんだけど、『理科十二ヶ月』って本があるんですよ。それを親父が買ってくれて、ただ、十二冊あるんですけどね、それ、その月々におうじたいろんな話を書いてあるわけです。それから、いろんな実験やる仕方とか、自然を観察することやなんかね。それを、だから毎月一冊ずつ読ませてわけなんですよ。ところがね、もう早く次のが見たくてしょうがないんですよ。親父は、いっぺんに出すと、全部いっぺんに読んじゃうからっていつてね、どっか押入れの隅っこの奥の方へしまつてあるんですよ。それを親父に、そうつと

内緒で、踏み台を持って来て、引つ張り出そうとしたりなんかしたことを覚えていますけどね。

右に見たように、朝永振一郎氏が子ども時代に愛読していたのは『理科十二ヶ月』でした。これと朝永氏が言った「アドヴァンスト・コース」の本も含めた研堂の理科読み物には、次のような単行本があります。

○石井民司（研堂）著

『理科十二ヶ月』全十二冊（博文館、一九〇二年二月～同年十月）

『少年工藝文庫』全二十四冊（博文館、一九〇二至二月～〇四年十二月）

『少年実験工藝百種』全冊（博文館、一九三三年六月）

○石井民司（研堂）著 堀七藏共著 ※この叢書は、一般読者も対象とする。

『常識叢書 第二編 電燈』全冊（敬文館、一九二五年二月）

『常識叢書 第二編 電氣の利用』全冊（敬文館、一九二五年二月）



「理科十二ヶ月」
石井研堂著
(個人蔵)

歴史・美術テーマ展示

「石井研堂の足跡を訪ねて」

3月14日（土）～5月10日（日）

研堂の編集した雑誌、著書や原稿、収集資料などとあわせて、理科読み物も展示します。

アイヌの民具とくらし

佐々木長生 民俗担当



アットウシアミブ（オヒヨウの皮） 渡部つとむコレクション

当館では平成一九年度夏の企画展「樹と竹―列島の文化、北から南から―」を鹿児島県歴史資料センター黎明館との共同企画で開催しました。当館では北の文化を担当し福島から東北・北海道、樺太からアムール川流域に至る東北アジアを視野に、ブナ林を主とする落葉広葉樹林文化を樹皮や刳物などの有形民俗文化財（民具）を中心に展示を構成しました。一方、鹿児島歴史資料センター黎明館は鹿児島から沖縄、

フィリピン・ラオスから中国へと東南アジアを視野に、竹の民具を中心とした照葉樹林文化について展示を構成しました。日本の文化を北と南から、東アジアとの関連から見ようとする「東アジア内海世界」という構想のもとに展示を試みました。この企画展の北の文化の展示で、北海道のアイヌの民具と東北から樺太そしてアムール川流域の民具を展示し、比較することができました。その共通する文化要素として、樹皮製民具が多様に使用されてきたことが挙げられます。また、東北から北海道アイヌには刳物の民具が多様に存在し、その製作方法として使用方法などに多くの共通点があることを展示資料で確認することができました。

アイヌに関する展示資料は、国立民族学博物館と当館寄託の「渡部つとむコレクション」から展示しました。東北地方の仕事を中心とする「渡部つとむコレクション」のアイヌに関する資料には、アットウシアミブ（アツシ）と呼ばれるオヒヨウの樹皮繊維で織られた衣類をはじめ、精緻な彫刻が施された盆や刳物類、神々への奉納されるイナウと呼ばれる信仰用具など、アイヌ民族の暮らしを物語る資料があります。

アイヌの樹皮の民具は、アットウシに代表されるオヒヨウの樹皮繊維ですが、シナノキの樹皮繊維のものもあります。シナ織の衣類は、山形県庄内地方や新潟県北地方にも着用されており、現在までその伝統技術が継承されています。また、シナ縄をなう用具として、アイヌではヘッチョと呼び十字形に細木を結わえ、これにシナの太綱をなうときからめ撚りをかけるものがあります。同じ形態の用具は、秋田市大平にもあり、南会津地方にもあります。南会津地方ではヒシギと呼び、岩手県ではテッチョと呼んでいます。南会津郡只見町ではシナ糸をヨツツオと呼んでおり、アイヌのヘッチョと語音が類似しています。

東北地方にはサワグルミやケヤキなどの樹皮を利用して、箕や穀物入れ、背負袋や籠類など多様に生活用具を製作しています。その一例に樹皮製の箕があります。東北地方では主にサワグルミの一枚の皮を折り曲げて作ります。切り込みをつけて曲げる方法とつけずに曲げる方法があります。後者の方法は桜の皮製でアイヌと青森県の一部に見られます。この方法は、アムール川流域では白樺シロカハの皮を利用して水入れや揺籠など様々な民具を作っています。アイヌでもヤライタンキと呼ばれる樹皮の椀がアムール川流域と同じ製法で作られています。

こうした樹皮製民具は、縄文時代の遺跡からも出土する一方、アムール川流域の白樺製の樹皮容器に製作方法の系譜をたどるものがあります。

アイヌの民具には、このように東北地方から北海道そして東北アジアへの文化の系譜をたどる要素が多く見ることが出来ます。

歴史・美術テーマ展示

「アイヌの民具とくらし」1月24日（土）～3月1日（日）

「渡部つとむコレクション」のアイヌ資料の選りすぐりをご紹介します。



チエプケリ（鮭皮靴） 渡部つとむコレクション

トピックス

館長サタデープロジェクト
自然との共生—博物館に求められるもの

会場：講堂
入場無料

このプロジェクトは、実際に自然科学系の博物館で研究や運営に携わっている人々、地域の自然を調査している人々などを博物館に迎え、その活動や考えを話していただき、館長との対談を通して、自然と共生する方法、そのために求められる博物館の役割などを考えるために計画されました。全5回のプログラムのうち第3～5回を1～3月に開催します。

海との共生

シーラカンスの調査を精力的に進めているアクアマリンふくしまの安部館長に、調査を始めた経緯、調査を通して得られた成果、博物館活動への波及効果などについて話していただきます。また、最近アクアマリンふくしまが行っているさまざまな新しい試みについて、活動の状況や効果を紹介していただきます。



シーラカンス

1月

「シーラカンスは語る」

1月17日(土) 午後1時30分～3時
ゲスト：アクアマリンふくしま館長 安部義孝さん

森との共生

只見の自然に学ぶ会代表で、只見のブナ林を世界遺産にする運動を展開している新国勇さんに、南会津地域のブナ林の特徴、規模、重要性を話していただきます。また、ブナ林を守り活用する試みを紹介してもらいます。



只見のブナ林

2月

「只見 ブナの森を愛す」

2月21日(土) 午後1時30分～3時
ゲスト：只見の自然に学ぶ会代表 新国勇さん

山との共生

ジオパークとは、地域の地形や地質を見所とする自然の中の公園。貴重で美しい自然遺産を保全するだけでなく、ジオツーリズムを通して自然のおもしろさ、奥深さを知ってもらい、また、地域の観光資源として活用して地域の活性化を目指すものです。ジオパークにするためには地元住民、市町村、博物館などの連携が必要です。みんなで「磐梯山をジオパークにする」ことを考えるための第一歩として、基調講演とパネルディスカッションを開催します。



裏磐梯爆裂火山

3月

「磐梯山をジオパークに」

3月21日(土) 午後1時30分～4時
基調講演：「ジオパーク先進地 有珠」
北海道大学名誉教授 宇井忠英さん
パネルディスカッション：
パネラー：磐梯山噴火記念館副館長 佐藤公さん
野口英世記念館学芸課長 小松山六郎さん
学芸員 竹谷陽二郎
コーディネーター：館長 赤坂憲雄
主催：「磐梯山をジオパークにする」実行委員会・福島県立博物館
後援：ふくしまサイエンスぶらっとホーム

春の展示 予告

常設特集展示

直江兼統とふくしま（仮称）

NHK大河ドラマ「天地人」放映でも話題となる、戦国時代・江戸時代初期の福島や会津と上杉氏・直江兼統との関わりを紹介します。（財）福島県文化振興事業団との共催事業です。

直江兼統は、越後の戦国大名であった上杉氏に仕えた武将です。上杉景勝は、現在の福島・山形・新潟の一部を治める一二〇万石の大名になりますが、この広大な領国の支配を担ったのが兼統でした。この時期には天下分け目の関ヶ原合戦が起き、時代は大きく移り変わってゆきました。

関連する人物の生涯や、ゆかりの地などを紹介しながら、県内に伝来した上杉氏や直江兼統関係の武家文書や、神指城をはじめとする県内の城館跡からの出土品を展示します。

（歴史担当 高橋充）



「直江兼統像」(『集古十種』当館蔵)

■春の常設特集展示は、平成二十二年四月二十五日(土)～五月三十一日(日)まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「寄贈記念 近世商家の文化」

大和弥コレクション

会期 一月二九日(土)

平成二十二年一月二日(月)

「アイヌの民具とくらし展」

会期 一月二四日(土)～三月一日(日)

「石井研堂の足跡を訪ねて」

会期 三月一四日(土)～五月一〇日(日)

ミュージアムイベント

館長サタデー・プロジェクト

自然との共生―博物館に求められるもの

第3回「シーラカンスは語る」

講師

アクアマリンふくしま館長 安部義孝さん

日時 一月一七日(土)午後一時半～三時

第4回「只見 プナの森を愛す」

講師 只見の自然に学ぶ会代表 新国勇さん

館長 赤坂憲雄

日時 二月二二日(土)午後一時半～三時

第5回「磐梯山をジオパークに」

基調講演「ジオパーク先進地 有珠」

講師 北海道大学名誉教授 宇井忠英さん

パネルディスカッション

「磐梯山をジオパークに」

パネラー

磐梯山噴火記念館副館長 佐藤公さん

野口英世記念館学芸課長 小松山六郎さん

学芸員 竹谷陽二郎

コーディネーター 館長 赤坂憲雄

日時 三月二二日(土)午後一時半～四時

木曜の広場

場所 講堂 入場無料

会津学講座

第一〇回「会津の市と市神祭り」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 佐々木長生

日時 一月八日(木)午後一時半～三時

第一一回「馬をめぐる民俗―猿索を中心に―」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 佐々木長生
日時 二月五日(木)午後一時半～三時
第二二回「民具が語る暮らし」

「只見の民具と生活」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 佐々木長生

日時 三月五日(木)午後一時半～三時

講演・講座

※は要申込

◎特集展関連行事

◎展示解説会

「野山の宝 化石・鉱物探検隊10周年成果展」

講師 化石・鉱物探検隊員

日時 二月八日(日)午後一時半～二時半

日時 三月二九日(日) 午後一時半～二時半

◎テーマ展関連行事

◎特別講座

「100年前の実験に挑戦」

―石井研堂の理科読物に見る

科学・技術・社会

講師 福島大学准教授 岡田努さん

日時 三月二〇日(金)午後一時半～午後三時

◎歴史講座

資料が語る人物史3「馬嶋瑞園と松平容保」

講師 学芸員 阿部綾子

日時 二月一四日(土)午後一時半～三時

資料が語る人物史4「石井研堂と幸田露伴」

講師 学芸員 佐藤洋一

日時 三月一四日(土)午後一時半～三時

◎体験講座

※「おもちゃをつくろう 風ぐるまを作ろう」

講師 解説員 五十嵐早苗ほか

日時 三月二二日(日)午後一時半～三時半

はくぶつかんで遊ぼう!

場所 体験学習室

「鬼の面をつくろう」

講師 解説員 渡邊美美 ほか
日時 一月三一日(土) 午前九時半～午後四時半

*展示解説員がご案内いたします。

*時間内随時受付 所要時間二〇分程度

*一二時～午後一時休憩

やさしい展示解説

*展示解説員による常設展の案内です。

*毎週土曜日、日曜日の午前十一時と午後二

時から三〇分ほど行います。

*一月一八日と二月一五日に予定していた実技講座「わ

らぞうりをつくろう」は、都合により中止となりました。

*要申込の行事は基本的に開催日の二ヶ月前より募集を

開始しますが、異なる場合もありますのでお問い合わせ

ください。

*その他、行事等の詳細につきましては、月行事予定や

ホームページをご覧ください。

一月～三月の休館日

年始 五日(月)

一月 一三日(火)・一九日(月)・二六日(月)

二月 二日(月)・九日(月)・二二日(木)・

一六日(月)・二三日(月)

三月 二日(月)・九日(月)・二六日(月)・

二三日(月)・三〇日(月)